

読書離れとスマホ

中垣芳隆

図書館の司書さん方と、図書館サービスの改善について話をすると、幾つかの課題の一つとして、以前に比べて一人あたりの貸し出し冊数が減っていることと同時に学生の読書離れが話題となる。

そういえば、かつては電車の中で通学の学生が本を開いている姿を見かけるのが普通であったが、いつのころからか、読書している学生は少なく、スマートフォン（スマホ）の画面をのぞいてウェブサイトを閲覧したり、SNSやゲームに興じたりしている姿を多く見かけるようになった。

こうしたことから、「大学生の読書離れ」というのは特段、目新しいことでもなく、日頃の光景からして時代の流れなのだろうと思っているのだが、実態は如何にということではデータを求めてみた。

2014年2月26日に公表された「第49回学生生活実態調査」の概要報告によると、「調査に協力した全国の国公立、私立大の学部学生8930人の1日の読書時間は平均26.9分で、同じ方法で調査している2004年以降最も短くなった。読書時間ゼロの学生は40.5%に達したという。

読書時間については男女で明確な違いが出ている。男子学生の読書時間は平均29.2分で10年間ほとんど変わっていない。これに対して女子学生の読書時間は24.3分と短く、しかも10年間で20%以上も減少している。

ニールセンが2013年5月に発表したスマートフォンの利用状況調査によると、女性のスマホ月間利用時間は男性の1.4倍長かった。1日当たりでは、女性の方が男性より約25分長く、女性のスマホ好きが目立っている。女子学生のスマホ利用時間が延び、読書時間を圧迫した可能性がある。」とある。

女子学生だけの学校に勤める者の一人としては、スマホ憎しと言いたいところであるが、確かに、書物や新聞など、個別のコンテンツについては、需要が減少しているのだろうが、新しいデバイスが次々登場し、情報の伝達ルートが多様化していることからすれば、彼女たちの知的コンテンツそのものに対するニーズが大きく減少していると結論づけるのは早計なのかも知れない。

と我が身を慰めてはみるものの、本には、自分以外の誰かが考えた「思考の形」が丸ごと詰まっている。本は、著者が読者を説得するために必死になって書いているもので、構

造というものを持っている。読み手は、読書を通して、論理の展開、脳みその回転、とはこうゆうふうにするのだということを会得できる。即ち、物事をきちんと体系化する能力、構造を分析する能力を身につけることができる。

彼女たちの長い人生を考えると、若い時代の「豊かな読書体験」の機会をスマホごときに奪われることのないよう、自己防衛を心がけてほしいと願うや切である。

(なかがき・よしたか 教授／教員養成センター)
